研究課題	平安時代の密教寺院における造仏の調査研究
研究代表者	杉田　美沙紀 （文学研究科史学専攻　博士後期課程）

１．研究目的

平安時代彫刻史において 9 世紀初めは仏像の造像が大きく変化した時期である。本格的な密教が伝えられ、多様な図像、経典をもとに数多くの新しい形と作風の仏像がつくられた。遣唐使廃止後の 10 世紀も大陸の文化が依然として伝わってきていて、それが珍重されていた様子が史料や文学作品から知られる。しかし、それとともに大陸の影響をあまり強く受けていない日本独自の様式「和様」と呼ばれる作風が確立していく様子も認めることができる。

10 世紀はいわゆる「和様彫刻」の完成に向かう「過渡的」な時代と考えることが多い。しかし、この時代には着目すべき彫刻作品が数多く残されていてより詳しく検討する必要がある。当該期の仏像、とくに密教寺院でつくられた作品の造像背景を明らかにすることは、近年さまざまな分野で論じられている平安時代における「国風」文化の成立と展開を考えるためにもきわめて重要と考えられる。

研究代表者は奈良、平安時代の彫刻作品の作風展開について仏像の光背を通して研究している（「奈良・平安時代の二重円相光背―形状と作風の展開―」（『大正大学大学院研究論集』41 号、2017 年 3 月 15 日）。その結果、10 世紀の作風の変化は非常にゆるやかであり、作風展開をより詳しく把握するためにはさらに彫刻作品全体の詳細な検討が必要であることが知れた。

平安時代彫刻史の展開を理解するためには、それぞれの彫刻作品の作風の詳細と造像背景を具体的に明らかにしていくことが必要である。それらの個別作品研究の蓄積からは「和様彫刻」成立に関わるあらたな視点が提供されることが想定される。とくに今年度は 10 世紀前半の彫刻作品の特色を具体的に明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

10 世紀彫刻の展開がわかりにくい理由の 1 つとして、この時代の作品には制作年代と作者、さらにはその造像背景がわかるものがきわめて少ない点にある。当該期の仏像の展開を理解するためには個々の作品の調査、研究を行うことが重要な手段となる。研究方法および調査、研究の内容をあわせて記す。

(1) 対象作品及び参考作品の調査と記録

今年度は京都府醍醐寺に所蔵される 10 世紀前半の作品を中心に調査、研究を行った。醍醐寺の所蔵する彫刻作品については『醍醐寺大観』第 1 巻（2002 年、岩波書店）などですでに報告されているが、そこでの報告は所蔵する全作品の詳細には及んでいない。今回はこれまで詳しく解説されていない 2 件を含む計 3 件を調査、記録の対象とした。対象作品は下記である。

①木造薬師如来及び両脇侍像（延喜 13 年〈913〉造立、霊宝館〈旧薬師堂〉安置、国宝）

②木造大日如来坐像（10 世紀造立、霊宝館安置）

③木造如意輪観音半跏像（10 世紀造立、霊宝館安置）

調査では寸法、形状、品質構造、保存状態、銘文の詳細を記述した。銘文は後世の修理銘などを含め、すべて記録した。

撮影はフルサイズ一眼レフカメラによる全像および面部の撮影のほかコンパクトカメラによる細部撮影、赤外線カメラによる墨書の撮影を行った。調査は指導教員の副島弘道教授、所属研究室の大学院生に補助を依頼し、醍醐寺当局のご協力を得て行った。

そのほかにも京都府六波羅蜜寺四天王像（天暦 5 年〈951〉）、東京国立博物館特別展「仁和寺と御室派のみほとけ―天平と真言密教の名宝―」出展の仁和寺阿弥陀三尊像（仁和 4 年〈888〉）など、9 世紀後半から 10 世紀前半につくられたことが明らかな基準作品の実見と調書の作成をおこなった。

また、戦前から戦後の美術書、雑誌、展覧会図録などから 9 世紀後半から 11 世紀につくられた彫刻作品の画像を収集し、デジタル化した。さらに東京国立博物館資料館が保管する帝国博物館所蔵資料中から大正期に撮影されたと考えられる研究対象作品の写真資料を収集した。重要なものは複写依頼を申請し、デジタルカメラによる複写を行った。

(2) 文献、史料の収集と検討

現在公刊されている『醍醐雑事記』（中島俊司編纂、1931 年）、『醍醐寺新要録』（醍醐寺文化財研究所編、1991 年）、「醍醐寺縁起」（『群書類従』第 24 輯所収、1960 年）に記された仏像に関わる記述を抽出して一覧にすることで平安時代から桃山時代の醍醐寺境内の様子、堂ごとの安置仏の状況を把握した。『新撰京都叢書』（臨川書店 1985-89 年）、『新修京都叢書』（臨川書店 1993-95 年）所収の地誌類から醍醐寺に関わる記述を収集し、近世における境内の安置仏の状況を検討した。また、醍醐寺の所蔵する明治から昭和期に記された文化財目録を用いて仏像の当寺に伝わる由来、境内における仏像の移動状況を検討した。

(3) 作風検討と考察

(1) で撮影および収集した画像を用いて他作品との作風の比較検討を行い、制作年代を考察した。その上で（2）で収集した文献、史料を用いて作品の造像背景、安置場所を具体的に検証した。

３．研究成果と公表

（1）得られた成果

以下、作品ごとに得られた研究成果および成果の公表を記す。

①木造薬師如来及び両脇侍像

本像は力強い表現を基調としながらもおだやかで全体を丁寧に整えようとする傾向を示していて、これまでにも指摘されているように上醍醐薬師堂の完成した延喜 13 年(913)頃につくられたものとみられる（注 1）。

調査の結果、以前にも推測したが中尊像の光背の二重円相部分は仏像本体と同時の作であり、仏像本体と同様に平安時代後期への過渡的な作風を示していることが確認された。中尊像の光背に付けられた 6 躰の薬師如来の小像のうち本体と同時の作とされる 4 躰はより詳細な形状、作風のデータをとることができた。このことから、像本体以外の細部にも 10 世紀前半の彫刻作品の造

形的特色を見出すことができた。

なお、この成果の一部は「5 木造薬師如来及び両脇侍像」（総本山醍醐寺監修、副島弘道編『醍醐寺叢書　醍醐寺の仏像』第 1 巻如来〈2018 年 1 月、勉誠出版〉）に報告した。

②木造大日如来坐像

本像の肉付きのよく奥行きのある体つきには平安時代前期彫刻の特色がよくあらわされるが、延喜 13 年(913)頃につくられた①木造薬師如来及び両脇侍像をはじめとした上醍醐諸像と比較するとおだやかで、それよりもやや下った 10 世紀半ば頃の作であることが考えられた。

本像の当初の安置場所は下醍醐五重塔であった可能性がこれまでにも示唆されている（注 2）。『吏部王記』によると五重塔は承平元年(931)に造営が計画され、約 20 年後の天暦 5 年(951)に完成した。12 世紀の『醍醐雑事記』五重塔婆篇によると塔内には胎蔵界の五仏が安置されていたという。その後の塔内の様子は 14 世紀の『隆源僧正記』にも見られ、さらにこれまで使われていなかった明治の文化財目録中にも大日如来像が置かれている記述が見られた。本像は尊名、像高、制作年代などから五重塔胎蔵界五仏のうち中尊像であった可能性がより強くなった。

以上の検討から本像は五重塔が完成した天暦五年（951）頃までにつくられ、近代まで安置されていたことが考えられた。このことにより、本像は 10 世紀半ばの制作年代がほぼ明らかな基準作品として評価できる可能性があり、今後さらに検討したい。

なお、この成果の一部は「23 木造大日如来坐像」（『醍醐寺叢書　醍醐寺の仏像』〈前掲書〉）に報告した。

③木造如意輪観音半跏像

本像は独特な形をしめす 10 世紀の作品として知られる（注 3）。改めて詳しく調査したところ技法構造、作風から 9 世紀末から 10 世紀初めにつくられた作品とみられ、とくに延喜 13 年（913）頃につくられた①木造薬師如来及び両脇侍像のうち日光菩薩像、旧五大堂安置の大威徳明王像と多くの共通点があり、それらとほぼ同時期につくられた可能性がきわめて高いことが考えられた。

本像は修理銘から寛文 9 年（1669）に下醍醐三宝院に安置されたことがわかる。そのことを前提として文献、史料を検討したところ、本像は 12 世紀には上醍醐准胝堂に置かれていた如意輪観音像にあたることが考えられた。

本像と同じ形の如意輪観音像は他になく、またその形を説く儀軌の存在は知られていない。本像は密教像である如意輪観音像に密教が伝わるよりも前の時代の造形が意図的に取り入れられてつくられた「意楽」の像であることが想定された。

以上のことから本像は木造薬師如来及び両脇侍像をはじめとした醍醐寺創建期の諸像と同じ 10 世紀初め頃に創意を凝らした形で造像され、12 世紀には上醍醐の中心的な堂であった准胝堂に安置されていたことが考えられた。

この成果の一部は第 37 回密教図像学会学術大会にて口頭発表した（論題「十世紀初頭の醍醐寺諸像と木造如意輪観音半跏像」、2017 年 12 月 2 日、於高野山大学）。また、口頭発表を補訂した「醍醐寺木造如意輪観音半跏像と十世紀前半の彫刻」を同学会の機関誌『密教図像』に投稿する予定である。

(2) 今後の課題、展望など

以上のように今年度の本学助成金による研究によって 10 世紀前半の彫刻作品の作風、造像背景、図像的特色の一端を明らかにすることができた。次年度は今年度の研究を継続、発展させて、その前後の時代につくられた仏像の個別作品研究を行うことによって当該期の造像の展開をさらに具体的に検証したい。

（注１）西川新次、副島弘道「薬師如来及両脇侍像」(『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代重要作品篇 5、1993 年、中央公論美術出版）ほか

（注 2）副島弘道「大日如来坐像（胎蔵界)」(佐野美術館編『佐野美術館開館 30 周年記念特別展壮麗な密教芸術の伝承～京都・醍醐寺の名宝』、1996 年)

（注 3）井上一稔「如意輪観音像・馬頭観音像」(『日本の美術』312、1992 年、至文堂）ほか